



| | |
|--------------|---|
| Title | 移動性から見る移動表現 |
| Author(s) | 高, 一波 |
| Citation | 日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 62-71 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/59654 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

移動性から見る移動表現

高一波

1. はじめに

移動は人間の活動における重要な一環であり、人間の認知及び言語生活とも深い関わりを持つ。しかしどのような表現が移動表現として成り立つのかは自明ではない。

- (1) 部屋に入った途端ひどい悪臭が襲ってきた。
- (2) ガラス張りの吊り橋を渡るには相当勇気がいるらしい。
- (3) 町をゆったり散策するのが好きだ。
- (4) 彼は「構わない」と言いつつ、私の前に立った。
- (5) ウサギはどこかに消えてしまった。

例 (1) (2) は一般的に移動表現であると認識されるが、例 (3) (4) (5) は人によっては移動表現と見なされない。移動表現と見なされない理由を挙げると、例 (3) の「散策」は移動よりも遊び・趣味のニュアンスが強く、例 (4) (5) は共に確かに位置変化が起きているものの、「立つ」「消える」は一般的に移動を表す動詞と見なされないため、表現自体が移動かどうかは判断が分かれるところである。また、「ペンを花子に渡す」においてペンが移動することで「渡す」を移動動詞と見るべきかどうか疑問が残る。

こうした現象は言語間において対照が見られ、第二言語学習者がその言語によって表される事象をどのように認識するか、及び学習者自身が第二言語を用いて事象をどのように表すかにも影響が出る。例えば日本語の「公園を散歩する」「公園で散歩する」は中国語に訳す際はいずれもほとんどの場合“在公園散步”にしか訳されない。“在”という中国語の前置詞は「物事が起きる場所を標示する」という点では日本語のデ格と共通しているため、学習者は「公園（ ）散歩する」の表現ではほとんどデ格を用いてしまい、「公園を散歩する」との違いも理解しにくいと述べる。

以上のように、移動表現と非移動表現の境界線はそれほど明確なものではなく、段階的に差異が見られるものだと考えられる。本研究は、「移動性」という概念を定義することによって、ある表現がどの程度客観的・典型的な移動事象を表しており、どの程度「移動」として認識されるかという度合いを規定することを試みる。

2. 移動性の判断基準

Talmy (1985, 2000) によると移動を構成する要素として<移動の事実 (MOTION)> という要素があるが、「移動の事実」の概念が如何に規定されるべきかは問題である。

本研究は、移動性の判断基準を以下のように規定する。

1. 動的な表現である。
2. 「位置」に関する変化がある。
3. 「位置」の変化は明示されている。
4. 仮移動主体は自発的に仮移動行為を行う。
5. 「位置」は物理空間に存在するものである。
6. 仮移動主体は物理的に存在するものである。

2. 1 動的な表現である

言語表現には静的な表現と動的な表現がある。例(6) (7)は事象の静的な、すなわち変化のない一面を切り取り表しているため、静的な表現だと言える。例(6) (7)が表す事象を写真に例えるならば、例(8) (9) (10)が表すものはいずれもビデオのような動的なものである。例(8) (9)においては、お茶が冷たくなる温度の変化や帆船が見えない状態から見える状態への変化が見られる。例(10)は例(8) (9)に見るような明示された変化がないものの、持続的な動的な事象を表している。

(6) 今日はやけに寒い。

(7) 壁に綺麗な風景画が飾ってある。

(8) 二人が話している間に、お茶はすっかり冷たくなった。

(9) 彼方の地平線から一隻の帆船が悠々と現れた。

(10) 彼は鳥のように二本の腕をバサバサと動かしながら踊っていた。

移動表現かどうかを判断する大前提として、その表現はまず動的な表現でなければならない。この場合、例(6) (7)は基準1を満たしておらず、例(8) (9) (10)は基準1を満たしていると見なされる。

2. 2 「位置」に関する変化がある

ここでの「位置」は物理空間上の位置や場所のみでなく、スケール上における特定の値の位置も指す。すなわち、同一スケール上における値の変動があるかどうかによって、基準2が満たされるかどうかが決まる。

例えば、例(8)の「お茶が冷たくなる」という文において、変化の主体となるお茶の温度が下がるということは、「温度」というスケールにおける値がより低い「位置」に変動することを意味する。例(11)の「すでに10時間も過ぎている」という文において、「時間」というスケールにおける値が、「裕次郎が失踪する」という参照の「位置」よりも10時間先の「位置」に変動したとして見ることができる。

また、例(12)の「森を彷徨う」に関しては、主体の「森での位置や場所」というスケールにおける値は具体的にどのように変動したかは明示されていないものの、確実に「位置」の変化が起こっているため、「位置」に関する変化があると見なされる。

(11) 裕次郎が失踪してから、すでに10時間も過ぎている。

(12) どのぐらい森を彷徨ったかはもう覚えていない。

一方、基準1を満たしているが基準2を満たしていない場合を挙げると、例(10)がある。例(10)の「彼は踊っていた」という表現は2.1でも述べたように基準1を満たしている。百科事典的知識により、主体の「彼」が踊ることで、その体力・消費カロリー及び立ち位置など様々な状態に変化が起こることが容易に想定できる。しかし、表現自体ではそれらの変化が起こるスケールを示していない、すなわちどのスケールにおける値の「位置」が変動したかは特定できないため、基準2を満たしているとは言えない。

2. 3 「位置」の変化は明示されている

基準3を満たすには基準2を満たすことが前提になっている。具体的に言うと、同一スケール上における値の変動があるという基準2の条件を満足している上で、スケール上における値の「位置」の変動は表現の中で明白に示されていることが基準3を満たす条件である。ここでの「明白に示す」というのは、当該表現においては値の変動そのものだけでなく、具体的に変動した量あるいは境界線を越えていることへの言及などもなければならぬということを示している。

例(11)は2.2でも述べたように、「時間」というスケールにおいて「裕次郎が失踪する」という参照の「位置」より10時間進んだことが明示されているため、基準3を満たしている。例(13)の「太郎は5kmも走った」も「距離」というスケールにおいて5kmの「位置」の変動が明示されているため基準3を満たしている。例(14)は部屋に入る前と後では主体の物理空間における位置は明らかに異なるため基準3を満たしている。例(11)(13)(14)に比べ、例(15)は単に「海沿いを歩く」という部分だけを見ると変化が明白なものであると言いがたい。しかし、「祠を見つけた」という結果を表す部分により、主体が移動した距離は「祠までの距離」であることが明示されているため、基準3の条件は満足していると思なされる。

(13) 太郎は5kmも懸命に走ったが、結局間に合わなかった。

(14) 土足で部屋に入らないでください。

(15) 海沿いを歩いていたら奇妙な狐の祠を見つけた。

2. 4 仮移動主体は自発的に仮移動行為を行う

本研究では、当該表現が移動を表しているかを判断する際に、当該表現が移動表現であると仮定した場合、移動主体に相当する要素を「仮移動主体」と呼び、仮移動主体が行う移動行為に相当する要素を「仮移動行為」と呼ぶ。例えば、例(13)の「太郎は5kmも懸命に走った」において、「太郎」と「走る」はそれぞれ仮移動主体と仮移動行為に当たる。この場合、「太郎」は自発的に動作を行うため該当表現は基準4を満たしている。

一方、「太郎はペンを花子に渡した」の場合、仮移動主体は「ペン」であり、仮移動行為は「渡される」ということになる。「ペン」は自発的に花子のところに行ったわけではないため該当表現は基準4を満たしていない。

2.5 「位置」は物理空間に存在するものである

ここでの「位置」は2.2と2.3でも触れた「スケール上における特定の値の位置」のことを指す。「位置」が物理空間に存在するものであるというのは、スケール自体は「温度」や「時間」といったものではなく、「距離」や「位置や場所」など物理空間と関わるものであることを意味する。

基準5によると、前に挙げた例(12)(14)(15)における「位置」はいずれも物理空間と関わるため条件を満足している。

(12) どのぐらい森を彷徨ったかはもう覚えていない。

(14) 土足で部屋に入らないでください。

(15) 海沿いを歩いていたら奇妙な狐の祠を見つけた。

一方、例(8)の「お茶は冷たくなった」と例(11)の「すでに10時間も過ぎている」は条件を満足していない。また、「太郎はペンを花子に渡した」というようなスケールが「所属」である場合も、一種の「位置や場所」だという見方もあるが、物理空間と関わりがないため条件を満足していると見なさない。

2.6 仮移動主体は物理的に存在するものである

仮移動主体が物理的であるほど、それが表す事象はより具体的で典型的な移動事象に近い。人や動物、交通機関、天体、水や花瓶といった物体、これらはいずれも物理的に存在するものである。それに対し、本研究では視線や思いなどは非物理的に存在するものとして扱われる。

また、例(16)のような表現は、実際の仮移動主体は「街道」ではなく発話者の視線であるため、基準6を満たしていない。

(16) 街道は、びわ湖の東岸の野を走っている。 (『国盗り物語』)

2. 7 移動性の算出法

以下では、どのように以上の基準を用いて移動性を判断するかについて説明する。

勿論、基準を多く満たせば満たすほど当該表現は高い移動性を有し、移動表現として認識されやすい。しかし、個々の基準の間には制約が存在しており、任意の数の基準を満たせば移動性が高いわけではない。

まず、1から3までの基準はマトリョーシカ式になっている。すなわち、1はもっとも基本的で核心となる基準であり、2の基準を満たすにはまず1の基準を満たしていることが前提となっている。また、3の基準を満たすにはまず2の基準を満たさなければならない。

次に、4・5・6はどちらでも一つ満たせば1ポイント(pt)としてカウントされ、そのうち二つを満たせば2ポイント、三つ全部満たせば3ポイントとしてカウントされる。ポイントが高ければ最終的に移動性が高い結果を得る。

以上の基準に基づく移動性の算出法を直観的に図に示すと以下のようになる。

図1

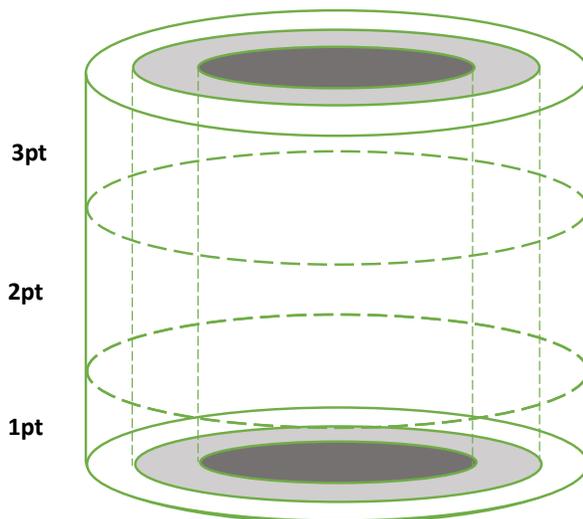


図1では当該表現の移動性を円柱の容積に例えている。

円柱の底面の一番中央に位置する黒い円は基準1を表す。基準1より一回り大きい灰色の円は基準2を表し、一番外にある白い円は基準3を表す。円柱の底面の面積は基準1・2・3のどれまで満たしているかによって決まる。もし基準1のみ満たしているのであれば面積は1、基準3まで満たしているのであれば面積は3となる。

一方、円柱の高さは基準4・5・6のうち、いくつの基準を満たしているかによって決まる。例えば、もし基準4・5・6のうち二つ満たしているのであれば高さは2となる。

以上をまとめると、移動性の算出法は以下のようになる。

移動性=X×Y

X=基準1・2・3の中で条件が満足された最大の基準番号値

Y=基準4・5・6の中で条件が満足された基準の数

これより上の算出法を用いて実際に表現の移動性を判断してみる。

例(17)では、「主人公の精神状態」というようにスケールが特定されており、「位置」の変化が見られるため基準2を満たしているが、その変化を明白に示していないため基準3を満たしていない。基準2まで満たした例(17)のX値は2になる。

一方、例(17)の仮移動主体は一見「主人公」であると思われるかもしれないが、実際は「主人公の精神」であり、客観的な存在ではないため基準6を満たしていない。また、基準5は「位置」が物理空間的なものではないため満たされていない。基準4・5・6の中で、例(17)が満たしているのは基準4一つのみであるため、そのY値は1になる。

(17) 主人公はどんどん狂気に走っていく。

(<http://ncode.syosetu.com/n4367i/>)

このように例(17)の移動性の値は2×1で2であることが分かる。

3. 移動性のレベル

前節では移動性を判断する基準と算出法について述べた。本節は移動性の数値に基づいた移動性のレベルについて説明する。

2.7 で見た算出法によって算出される移動性の数値は以下のように六段階ある。また、「※」マークがつく場合は、基準4の成立も事実上基準2を前提としているため、基準1のみの場合だと基準4を満たせず、そのような例文が存在しないことを意味する。

表1

| 移動性の数値 | 基準の満足状況 |
|--------|--|
| 1 | 1×1 基準1および基準4・5・6の中から一つ満足している |
| 2 | 1×2 基準1および基準4・5・6の中から二つ満足している 2×1 基準2および基準4・5・6の中から一つ満足している |
| 3 | 1×3 基準1および基準4・5・6をすべて満足している 3×1 基準3および基準4・5・6の中から一つ満足している |
| 4 | 2×2 基準2および基準4・5・6の中から二つ満足している |
| 6 | 2×3 基準2および基準4・5・6をすべて満足している 3×2 基準3および基準4・5・6の中から二つ満足している |
| 9 | 3×3 基準3および基準4・5・6をすべて満足している |

六段階の移動性数値とそれぞれの実例を併せて見ると表2になる。

表2

| 移動性のレベル | |
|---------|---|
| レベル1 | <p>1 × 1</p> <p>基準1 および基準4： (18) 三人は各々の<u>考えや思いを巡らせている</u>。 (http://ncode.syoasetu.com/n4586db/)</p> <p>基準1 および基準6： (19) 兄から何の予告なく、いきなり<u>顔を強く殴られる</u>。 (http://ncode.syoasetu.com/n4560bx/)</p> <p>※基準1 および基準5</p> |
| レベル2 | <p>1 × 2</p> <p>基準1 および基準4・6： (20) 晃は2年離れた<u>ピアノを一人で弾いていた</u>。 (http://ncode.syoasetu.com/n6449bz/)</p> <p>※基準1 および基準4・5 基準1 および基準5・6</p> |
| | <p>2 × 1</p> <p>基準2 および基準4： (21) 近頃、知人たちの間に、ひそひそと交わされる<u>噂が拡まっていった</u>。 (「化生のもの」)</p> <p>基準2 および基準5： (22) 日本の「<u>木の文化</u>」を全世界にアピールするため、… (http://www.pref.kochi.lg.jp)</p> <p>基準2 および基準6： (23) その時に出来た<u>電気を増幅させて</u>、…一部をモーターの動力とすれば、ずっと発電できないかな。 (http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp)</p> |

| | |
|-------------|--|
| <p>レベル3</p> | <p>1 × 3 ※基準1および基準4・5・6</p> <hr/> <p>3 × 1 基準3および基準4： (24) 1880～2012年の傾向では、<u>世界平均気温は0.85℃上昇しています。</u> (http://www.jccca.org)</p> <p>基準3および基準5： (25) 世界各国から集まったテレビカメラが<u>この風景を「緊急ニュース」</u> <u>という形で世界中に伝えた。</u> (https://ja.wikipedia.org/wiki/ベルリンの壁崩壊)</p> <p>基準3および基準6： (26) <u>ウナギ</u>にホワイトソースをぬり、オープンで<u>色がうすくつくぐら</u> <u>いに焼く。</u> (https://chefgohan.gnavi.co.jp)</p> |
| <p>レベル4</p> | <p>2 × 2 基準2および基準4・5 (27) 宣教師が長年布教しても日本で<u>キリスト教が広まらないのはなぜ！？</u> (http://blog.livedoor.jp)</p> <p>基準2および基準4・6 (28) 吾々の間に朝鮮の作品が賞美せられてから、<u>長い年月は過ぎた。</u> (「民藝四十年」)</p> <p>基準2および基準5・6 (29) その山の茶屋では、志賀高原の松の翠からこしらえた松葉茶を売っている。はじめて登って来た日に、私は<u>それをすこし買って、山口にいる良人のお父さんのところへ送った。</u> (「上林からの手紙」)</p> |
| <p>レベル5</p> | <p>2 × 3 基準2および基準4・5・6：</p> |

| | |
|------|---|
| | <p>(30) <u>二人は…、また旧華族屋敷に住んでおり、気まぐれに町を散策している。</u> (http://ncode.syosetu.com/n7578co/)</p> <p>3 × 2 基準3および基準4・5： (31) <u>この両者の縫合線は、…南は樺沢岳附近に至り、北は御山谷の屈曲点附近を過ぎている</u>とのことである。(「黒部峡谷」)</p> <p>基準3および基準4・6： (32) 象はそのままエサを食べるために、<u>立ったまま木に届く長さの鼻</u>を手に入れました。(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp)</p> <p>基準3および基準5・6： (33) そんな学園から隣国トルティリスア王国に住む<u>一人の少女へ、入学許可書が届いた。</u>(http://ncode.syosetu.com/n9125dg/)</p> |
| レベル6 | <p>3 × 3 基準3および基準4・5・6： (34) <u>傾斜の緩い河沿いの段丘を辿って行くと、落葉松の若芽が浅緑に萌え、青葉を背景とした白樺の白い幹は益々白い。</u>(「溪三題」)</p> |

表2に見るように、移動性がレベル5以上になるとより典型的な移動を表す傾向が見られる。レベル5以上の条件を見ると、基準3を満足している場合がほとんどであり、基準2を満足した場合は基準4・5・6のすべてを満たさなければならない。無論、レベル4とレベル5の移動性の境界線はそれほど明確なものではない。すべての表現においてレベルの高いほうがレベルの低いほうよりも移動を表しているわけではなく、レベル間の差はあくまでも高いレベルに「移動の事実」を有する表現が現れやすいことを意味する。

4. おわりに

本研究では「移動性」という概念を用いて、ある表現がどの程度客観的・典型的な移動事象を表しているかの度合いを示し、移動性がレベル5以上の場合には典型的な移動表現として認識されやすいことが分かった。

しかし今後の課題として、本研究の六つの基準のみで移動性の比較ができない場合もあり、基準にはまだ細分化する余地があることが示唆される。例えば「彼方の地平線から一隻の帆船が悠々と現れた」のような出現文や、「ウサギはどこかに消えてしまった」のよ

うな消失文は六つの基準をすべて満たしているが、「太郎は学校の前を通った」という文と比較すると、後者のほうがより移動として捉えられやすい。そのため、本研究で提示した六つの基準の他に、より細分化した具体的かつ的確な基準が必要だと思われる。

5. 参考文献

- 影山太郎 2001 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 丸尾 誠 2005 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社
- Jackendoff,Ray. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Talmy,Leonard. 1985.”Lexicalization Patterns:Semantic Structure in Lexical Forms”. *Language Typology and Syntactic Description*,vol. III,*Grammatical Categories and the Lexicon*,T. Shopen (ed.) ,Cambridge:Cambridge University Press,pp.57-149
- Talmy,Leonard. 2000.”A Typology of Event Integration”. *Toward a Cognitive Semantics*,vol. II :*Typology and Process in Concept Structuring*,Cambridge, MA:The MIT Press,pp.213-288

6. 用例出典

- 木暮理太郎 1919 「黒部峡谷」 『山の憶い出 下』平凡社
- 木暮理太郎 1924 「溪三題」 『山の憶い出 下』平凡社
- 司馬遼太郎 1971 『国盗り物語』新潮文庫
- 豊島与志雄 1966 「化生のもの」 『豊島与志雄著作集 第五卷』未来社
- 宮本百合子 1981 「上林からの手紙」 『宮本百合子全集 第十七巻』新日本出版社
- 柳宗悦 1984 「民藝四十年」 岩波文庫